

優秀修士論文概要

百済夫餘出自説と百済史の展開

韓 相賢

本稿の目的

百済の建国について『三国史記』を含む朝鮮側の文献と『周書』、『日本書紀』の中国、日本側の文献では、その建国集団が夫餘に由来したと伝えられている。百済内部からも夫餘出自説は絶えず唱えられ、その痕跡は様々な史料に残る。しかし、百済王室の夫餘出自は、実証的には根拠が薄弱であるにも拘わらず、素朴に史実と認定されてきた。近代日本の研究は夫餘の勢力が4世紀に南下して百済を建国したとみなしており、韓国の研究も近代日本の研究を植民史観と規定し、その研究成果を批判していたものの、百済の建国集団が夫餘に由来したことに対しては否定しなかった。このような研究の傾向は民族主義史観の影響によるものといえる。

韓国の民族主義史観において、古代朝鮮三国（高句麗、百済、新羅）はその構成員を同じ民族とみなして、朝鮮民族（韓民族）の歴史上、もつとも強力であり、偉大な国家であったとする。すなわち、韓国の近代国家形成期の要請を過去に投影し、民族史を構築したのである。百済夫餘出自説は、このような民族史を支える重要な一角であった。高句麗、百済が夫餘に由来したという伝承は、朝鮮民族（韓民族）の起源が古朝鮮↓夫餘↓朝鮮三国に連なるという仮説において、中核をなすものである。つまり、百

済夫餘出自説に対する再検討は、このような民族史形成を支えてきた根幹に批判を加え、朝鮮古代史を新たな観点で見直す契機を提供できる。

本稿の方法論上の問題として、文化人類学者のマーシャル・サーリンズが支配者は拠って立つ支配基盤を超越しなければならず、外部に権力の由来を求め正当化する外来王説を提唱し、神話、伝説の語る外来王は世界に広く共通して見られると論じる点に注目する。こうした視点から具体的に高句麗の建国伝説を分析し、その伝説を創出した同時代の創出主体の意図と論理に注目した研究がある。これと同様に、百済の始祖伝説についても、伝説を創出した主体の意図や論理に着目し、始祖の出自問題は史実か否かとは別個に百済王権形成期の問題として考察することが求められる。

各章の内容

本修士論文は4章立てで構成する。第一章は「百済王名「近」と夫餘出自説」である。歴代百済王には、王名に「近」字を冠する王が3人存在する。13代近肖古王、14代近仇首王、21代近蓋鹵王である。これらの王以前に、各々の王名が対応する王が3人存在する。第4代蓋婁王、5代肖古王、6代仇首王である。先行研究では、王名の「近」字を血縁に基づく継承関係の強調と解釈してきたが、本稿ではこれを高句麗、夫餘の習俗を模倣したものとして解釈し、百済が夫餘出自説を含む王統譜を創出する過程の一環とみなす。そして、百済の「近」字を冠する王名と夫餘出自説の創出背景について検討を行う。

第二章は「百済王権思想の形成」である。第一章で検討した夫餘出自説創出の背景をもとに4世紀に確立した百済の王権思想の形成過程を検討する。上述した13代近肖古王は、夫餘出自意識を骨子とする百済王権を確立する過程で、政治的業績を積み重ねていく。第一は、369～371年の

対高句麗戦争である。第二は、東晋に朝貢し「鎮東將軍樂浪太守」に冊封されたことである。第三は、倭国に七支刀を贈与し、倭国との関係を定立することである。このような政治的業績と百済の王権思想確立との関係を探り、王権思想の確立過程を検討する。

近肖古王、近仇首王の後、「近」字を冠する百済王名が見えなくなるが、5世紀後半に21代近蓋鹵王によって再び「近」字を冠する百済王名が登場する。近蓋鹵王は北魏への上表文の冒頭において百済の源は夫餘に由来すると言明している。そこで、近蓋鹵王がいかなる状況下で登場したかを検討し、近蓋鹵王と夫餘出自意識との関係を考察する。

第三章は「百済夫餘出自説の変容」である。『三国史記』、『三国遺事』によると、百済の国姓は「扶餘」氏である。しかし、中国正史にみえる百済の国姓は「餘」氏であり、後に「扶餘」氏となる。この問題に対して先行研究では、百済の国姓は最初から「扶餘」氏であり、中国正史にみえる「餘」氏は「扶餘」氏を略したものともみなしてきた。本稿では、これを批判し、6世紀における百済夫餘出自説の強化と結びつけ、国姓の「餘」から「扶餘」への変化について検討する。さらに、国姓の「扶餘」がなぜ「夫」ではなく、「扶」であるかについて検討を行う。一般的に考えると「夫」と「扶」は音通であるが、この「夫餘」から「扶餘」への変化は明らかかな転換期が存在しており、その時期は百済国姓が「餘」氏から「扶餘」氏になった時期とほぼ一致している。したがって、「扶餘」の創出を百済夫餘出自説の強化の一例として解釈できる。

第四章は「百済における夫餘出自説の歴史的意義」である。百済が王室の出自を夫餘に求めた主要な誘因は、中国王朝の夫餘認識に根ざしていた。中国王朝における夫餘は前漢代まで警戒すべき異民族の一つであったが、後漢代に至ると、夫餘王が入朝して君臣儀礼を行うことによって、中国王朝における夫餘は「東夷の藩国」を象徴するようになった。しかし、3

4世紀を経て慕容鮮卑によって夫餘が実質的に滅ぶと、「東夷の藩国」が消滅する。これは中国王朝における自己を中心とする礼的秩序の維持に不整合が生じる結果を生み出した。百済はこのような中国王朝の立場を知悉しており、その礼的秩序の空白に自己を位置づけるため王室の夫餘出自を唱えた。つまり、百済は自己の存在を中国王朝に対し無視しえない認知を得ることができ、一方中国王朝には礼的秩序の空白を埋めることができるという双方の思惑が一致したといえる。

本稿の結論と今後の課題

百済夫餘出自説は、初期百済の一王系であった比流系が自己の王位継承を確固たるものとするため創出されたものであった。すなわち、夫餘出自を唱えることで中国王朝から承認を得て、その承認に基づいて自己の権威を高めたのである。それ以来の夫餘出自説はその時代の現実の要請に附合して具体的要素が変容していく。5世紀の夫餘出自説は激化する高句麗との抗争という現実の中で変容しており、6世紀に至っては、百済復興の過程で夫餘出自説が再び強調されることになる。要するに、百済夫餘出自説は百済史の転換期に繰り返し標榜され、その度に百済を内外に再規定していたのである。百済史の展開を規定する重要なファクターとして作用し続けていたといえる。したがって、百済史における夫餘出自説の歴史的分析は、百済史のトータルな解明にとっても重要な視角となる。

さらに、古代東アジア世界の歴史展開においても独自の意義を有していたのである。百済夫餘出自説は百済の一王系の比流系が自己の王位継承を確固たるものとするために誕生したが、それにとどまらず、中国王朝の関心を喚起させ中国王朝側の礼的秩序に変化を及ぼす契機を与えた。つまり、百済と夫餘を同一視した結果を生み出しており、「夫餘」は百済によって

創出された「扶餘」に転化したのである。このような認識の変化は東アジア世界に広がり、7世紀以降において「扶餘」は「夫餘」の表記として一般化する。

こうした歴史的展開は、百済の古代東アジア世界の国際秩序に対する理解に基づくものであって、その中に自己を位置づけるため熾烈に苦悶した結果であったといえるのであろう。また、このような一連の行為は、百済が周辺地域において自己を優位に位置づけるためであった。すなわち、百済は高句麗、新羅のように自己を中心とする独自の世界観を構築したのではなく、自己を中国中心の世界に位置づけることによって朝鮮半島と日本列島にかけての自己の優位性を誇示しようとしたのであろう。

また、百済夫餘出自説は、百済滅亡後にも生き残り、その存在は後代の現実の要請によって利用されていた。たとえば、『三国遺事』北扶餘条に見える夫餘の始祖伝説である。先行研究では、『三国遺事』の始祖伝説には『三国遺事』成立以前に見えない記述があるため、その史料的价值を高く評価してきた。しかしながら、そこに伝える扶餘の国姓「解」氏についてはきわめて疑わしい。国姓は、中国王朝との交渉のため制定されたのであった。しかし、中国王朝と夫餘の交渉に関する中国史料には、その国姓を「解」氏ではなく、「餘」氏と伝えており、「解」氏の実体を疑わざるを得ない。したがって、『三国遺事』の成立期である高麗時代、或いはその前代である統一新羅の時代状況を踏まえて再検討する必要がある。

つぎに『三国史記』百済本紀、『三国遺事』に見える百済始祖・温祚伝説もそうした事例といえる。温祚伝説によると、温祚は高句麗の始祖・朱蒙の息子であると伝えており、百済が高句麗に由来すると述べている。先行研究では、これを史実として受け入れてきた。しかし、百済は7世紀中葉まで、高句麗と敵対的関係を維持しており、百済の始祖が高句麗の始祖に由来したとの説明は納得しがたい。百済夫餘出自説は、高句麗への対抗

意識によって変容した側面もあるがゆえに、尚更疑わざるを得ない。さらに、高麗時代に成立した両書を除くと、同時代史料で百済の始祖が高句麗に由来したとの記述は見られない。つまり、元来別個に夫餘出自を唱えた高句麗と百済の系譜が、後世に至り何らかの目的のために結びつけられたのであろう。その解明には、高句麗、百済滅亡後の夫餘出自説がどのような歴史的意義をもつようになったかを検討する必要がある。すなわち、両者の問題は、百済滅亡後の夫餘出自説の意義がその時代の現実の要請によって変容したことを示唆する。したがって、百済夫餘出自説は、百済が存続していた時代のみならず、その後の朝鮮史の展開に対する思想上の意義があるといえるのであろう。